に帰したものと推察される。

三、門人

皓山の門人としては、山澄甫庵・杉山恭蔵・平田景順などが著名であるが、『皓山日記』によればこのほか相当多数の門人を教育していたことが窺われる。皓山没後は亡羊について学んだ例に平田景順があるが、読書室物産会には皓山の一門もよく協力して出品参加している。皓山自身は読書室物産会の文化五年の初回から死去する前年の弘化二年の第三二回までほぼ毎年欠かさず出品し、亡羊と協力して京都本草学隆盛のためによく尽力したことがわかる。

（岐阜県立大垣工業高等学校）

江戸時代後期の小児科学

安達原曄子

江戸時代後期を一八世紀末から一九世紀末とすると、この頃には小児科を専門とする医家も増え、専門書も多い。ここでは小児科専門書である『保嬰須知』（片倉鶴陵）、および『医事小言』（原南陽）、『提耳談』（北尾春圃）、『観聚方要補』（多紀元簡）、『校正方輿輗』（有持桂里）、『内科秘録』（本間棗軒）の小児篇をとりあげた。本間棗軒を除けば、これらの医書の著者は一七五〇年代に生まれており、同年代といえる。原南陽と本間棗軒は古方派で蘭学もとり入れており、多紀元簡は考証学派、片倉鶴陵も多紀家で学んだが賀川玄迪、嶺春泰にも学んでいる。有持桂里は折衷派で、北尾春圃は田代三喜の伝を受け継いだともいわれる。これらの異なった流派に属する医家の六書の小児科領域を調べた。

項目については、どの書も驚（驚風、急慢驚）、および疳を

大きくとりあげており、古書にみられる初生養護、鬼病、無辜病、客忤、変蒸といった項目もみられる。

処方の特徴をみると、各書の処方数はいずれも一〇〇以上であるが、三〇〇を越えるものはない。これは『医心方』や『万安方』の小児科領域の処方数よりもずっと少ない。しかし、『医心方』では内服より外用の処方のほうが多く、『万安方』でも内服は六七パーセントであるが、今回調べた六書では『医事小言』を除けば内服の占める率はどの書も九〇パーセント以上になっている。『医事小言』では民間療法を多く採用しているため、八五パーセントである。また、『万安方』では、内服では煎剤のほうが丸・散剤よりも少ないのに比べ、今回の六書では『保嬰須知』を除いてすべて煎剤のほうが多い。とくに『提耳談』では九四パーセントと多い。単剤による処方の全処方に対して占める率も、『医心方』では七二パーセント、『万安方』では三二パーセントなのに対し、六書ではいずれも二〇パーセント以下である。構成生薬が一〇以上の処方は『医心方』には一つもみられず、『万安方』でも一〇（一パーセント未満）しかなかったのに比べ、六書では六パーセントから三二パーセントのあいだである。以上のことから、江戸時代後期の小児科領域は、各書とも処方数は少ないが、処方はより複雑なものになった傾向にある。また、引用文献は六書全部で、九九にものぼる中国の医書を挙げており、これらの医書を参考にして要領よくまとめ上げた感がある。

しかし、各書をみるとかなり個性がにじみ出ている。『傷寒論』や『金匱要略』からの引用は、古方派の書である『医事小言』や『内科秘録』において、引用されている率が高い。加減方の占める率は『提耳談』では四〇パーセントと最も高く、『内科秘録』が一八パーセントでそれに続く。『提耳談』では合方も多く、構成生薬の数が多い処方が多数を占めている。また、宋以前の中国の医書からの引用は全くない。『観聚方要補』では、姜・棗湯などで服用するように指示のある処方は四六パーセントと最も高い。つぎに『保嬰須知』の二七パーセントが続く。いずれも考証学派の著書である。服用に姜・棗などを用いることは宋の時代によく行われたといわれるが『観聚方要補』では宋の時代の医書や著者名の引用が、一二八回の引用のうち、七四回を占めている。『医事小言』や『内科秘録』では唐

以前の医書や著者名の引用回数が多い。これに対し、金・元時代のものの引用は『医事小言』には全くなく、『内科秘録』でも三九回の引用のうち二回にすぎない。しかし、両書とも明時代のものはかなり引用している。

各書に引用が平均して多いのは明代のものであった。最も引用回数が多かった中国の医書は『千金方』である。これは初生養護の部の引用や紫円、龍胆湯の引用が多いためと考えられる。次に多いのは『幼幼新書』、『太平聖恵方』の順であるが、これは『観聚方要補』での引用が大部分である。一般に平均して多く引用されたのは、『千金方』、『外台秘要方』、銭仲陽と『小児薬証直訣』、陳文仲と『活幼心法』、『医学入門』、『万病回春』、『世医得効方』、陳復正と『幼幼集成』であった。

『傷寒論』と『金匱要略』の処方で、比較的どの医書にも引用されたのは、人参湯、葛根湯、小柴胡湯、大柴胡湯、八味丸であった。

江戸時代後期の六書の小児科領域をみると、中国の多くの文献を駆使して、各自の属する流派や自己のやり方にしたがって、要領よくまとめているように感じられる。しかし、日本で創案された処方の占める率は『提耳談』が最高であるが七パーセントにすぎず、引用文献も中国のものは六書全部で三九七回であるのに対し、日本のものは三七回にすぎない。しかし、疾病の概念には蘭学の影響と思われる変化が著しいし、北尾春圃のような、独自の処方運用を行った医家もおり、当時の医学は大きな躍動の時代にあったと思われる。

（国立東京第二病院）